尚武のこころ

尚武のこころ

三島由紀夫対談集

日本教文社

初版発行　昭和45年9月25日

三島由紀夫対談集

尚武のこころ

¥400

〈検印省略〉

発行　株式会社　日本教文社

辻村彦次郎

107 東京都港区赤坂九―六―四四

TEL・東京(03)四〇一―九一一一(代)

振替　東京　五五五一九番

印刷・飯島印刷

製本・凸版製本

© 1970. Printed in Japan　落丁・乱丁はお取替え致します

0030-7021-5809

目次（対談順）

天に代わりて／小汀利得　3
サムライ／中山正敏　23
刺客と組長／鶴田浩二　47
大いなる過渡期の論理／高橋和巳　59
守るべきものの価値／石原慎太郎　87
現代における右翼と左翼／林房雄　115
二・二六将校と全学連学生との断絶／堤清二　137
剣か花か／野坂昭如　149
尚武の心と憤怒の抒情／村上一郎　171
エロスは抵抗の拠点になり得るか／寺山修司　191
あとがき　三島由紀夫

装

画

磐

広

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

天に代わりて

■小汀（おばま）利得（としえ）（評論家）

〈「言論人」昭和43年7月第48号〉

〝日本人〟とはなんだ！

小汀　まえにお目にかかったことはあるけど、おしゃべりははじめてですね。

三島　はじめてのようなもんです。今日のテーマは〝天に代わりて〟だそうですが、小汀さんが〝天に代わりて〟の役で、私は不義の方ですかな。（笑い）　討たれの方ですね。両役がないとチャンバラになりません。

小汀　いや、ぼくは年中つまらんことを発表していて社会に害毒を流しているから、あなたが主役で私が拝聴役だ。

三島　この間も「言論人」を拝見したんですが、ジャーナリズムの偏向ということがいわれていますね。これは相対的なもので、言論の自由も左翼の言論の自由と右翼の言論の自由がある。私も小説を書いていますときはさほどに感じないけれども、文壇というところは、文学賞など審査する場合、私ははっきりいえますが、かりにも思想的偏向で作品を選んだことはない。たとえそれが、共産党員であろうがなかろうが、自分と政治的意見がかわろうが、文学作品としてよければいいという立場を通しております。しかしひとたび評論の世界に入ると、なるほどむずかしいもんだなということを最近痛感したことがあります。

私事ですけれども『中央公論』（昭和四十三年七月号）に「文化防衛論」というのを書きました。つまらんものですが、一所懸命書いたんで七十枚ほどの長いものになった。そうすると、読売新聞と東京新聞は、それぞれ林房雄さん、林健太郎さんが文壇時評をやっておられるからいろいろ親切に採り

上げてくださる。見ようによっては親切すぎるわけですね。ところが朝日、毎日は一行も取扱わなかった。黙殺です。朝日は長州一二さんがやっていますが一行もとりあげないし、毎日は社内記者がやっていますが、やはり一行もふれない。そうすると、一つの現象があって、この目鼻立ちがいいか悪いかわかりませんが、そこに人間がいることは確かなんですね。それを黙殺するということは、たぶんに意識的だ。意識的な態度にちがいないと思うのは、あるいは私のウヌボレかも知れません。その辺が、こっちがウヌボレで、つまり偏向だという場合と、それから実際に偏向である場合の区別がつけにくいんですね。これは実にむずかしい。

私がそんなことをいうと、「あの野郎はつまらんものを書きやがって、ウヌボレやがって、とり上げられないのは当り前だ」ということになる。じゃ第三者から見た場合はどうかというと、その第三者の中に右も左もいる。いいという奴と、黙殺するのが当然という奴がいるかもしれない。第三者だって公平とはいえない。言論の偏向ということは実にむずかしい。

小汀　そりゃむずかしいもんです。誰しも公正にはなりきれない点がある。だから面白いともいえるし、だからむずかしさもある。ただ偏向ぶりが極端かどうかだ。

三島　そうですね。もう一つはテレビの場合、ぼくらは実にニュース取材というのは困るんです。うっかり映像を出すと、映像にウソはつけない、私がカメラの前に立つ、何かしゃべる、何かをやる、それをフィルムではどうにでもなるということですね。しまいにちょっとしたコメンタリィをつけて「……と三島は意気揚々、過激な言論を吐いて高笑いをしていた」なんていわれたら、これはもうマンガになっちゃう。（笑い）

マンガにされるのも悲劇にされるのも、みんな向こう様の自由。ですから言論の自由にしろ、偏向にしろ、われわれは実に微妙なところで生きているということです。

小汀　ほんとうにそうです。この間もグループ・サウンディングに出てくれというんです。何とかいう作曲者とそれから菅原通済君や落語家の誰だったか、それをNETだったかでやっているのを見たことがある。それとやはり同じような企画で、その作曲者、ほんとうは杉山とかいうことは知っているが、その杉山を相手に討論してくれというんだ。ぼくはそんなつまらないことを討論するのはきらいだし、資格もない。だから第三者を集めて、第三者同志で批判するならいい、たとえば教育者の小尾虎雄君とかを出すなら、ぼくも出ようといった。小尾君なら長い間東京都の教育行政をやってる。それなら出てもいいといった。局側が名前を出したんで、ぼくも名前を出して小尾君を指名した。そうすると何時間か経って、電話で、小尾さんは出られないといってきた、だからやはり杉山さんを相手にやってくれというんだ。その電話にはウチのばあさんが出て、「それは私もきいているけれども、主人はそれなら出ないといったじゃありませんか」といって蹴っ飛ばしたんです。

これはその一例ですが、そういうのに出ると、向こうの分がいいのにきまっているんだ。グループ・サウンズなんかに、わあっと喜んでいる小娘ども、おかめひょっとこ、かぼちゃみたいな面の小娘どもで、わあわあいっている奴らです。ぼくは通済が出たときに、それをみているんだ。(笑い)　……そんな奴らを背景にして物をいうなんてこれほど馬鹿気たことはないでしょう。ぼくは分が悪いことなんかどうでもいいから、やっつけることは天に代わってやっつけるけれども、(笑い)しかしやっぱり小汀が負けた、三島が負けたというようにもっていかれるし、そうみえるということは、自分

のためじゃないですよ。社会、公共のために悪いから、それで出ないんだ。そういう企画をしてくるんですよ。それをたくみにやるから、まさかヤボなことばかりもいってられませんよ。

ついでにいうけれども、鹿内君のやっている、あれはフジテレビか、あそこに出たとき、ベ平連の小田実といったかな。

三島　ああ、とんでもない野郎です。（笑い）

小汀　そのベ平連、あれは北がやられれば顔色を変えるくせに、南がやられるときは何もいわない男で、ベ平連じゃなくて、ベ戦連の方だ。戦争をけしかけているんだから。（笑い）……そのベ戦連を大層偉いようにとり上げているんです。そこへ無着成恭という寺の坊主の、あんまり日本語のできない人、（笑い）それと対等で議論するというんだ。ぼくは藤井丙午君と一緒に出たが、しゃべる機会がほとんどない。つまりこちらにしゃべる機会を司会が与えないようにしているんだ。もっとも特別に坊主に機会を与えたわけじゃないけれども、発言したら最後、マイクをはなさないんだ。時間を独占するんだ。そんなバカなことがありますか。時間はきまっているのに、片方だけより多く利用できるという土俵はありませんよ。向こうが七分の土俵を使えて、こちらは三分しか使えない、そういうたくみな戦術をつかうんだ。

三島　それは危ない。（笑い）

小汀　ほんとうに危ない。

三島　それとは違いますが、このまえ、われわれの間に日本文化会議というのができた。ところが朝日新聞なんか、せいぜい角砂糖ぐらいの紹介記事でした。新聞ばかりか、週刊誌の扱いもずいぶん

ちがいましたね。私もメンバーの一人だから、またウヌボレといわれるかも知れませんが、とにかく最近の言論界の出来事としては相当大きな位置をしめると思うんですがね。ところが、京都の左翼側の学者がやった科学者京都会議の方は、朝日など一面に大きくとり上げていながら、日本文化会議はせいぜい十行記事だった。それにくらべて他紙、ことにサンケイは、七段で報道している。解説までつけた新聞もある。どうも変です。

ところで、いま無着成恭の話がでましたが、私はよく知らなかったんです。それがタクシーに乗っていたとき、ラジオで無着成恭が子供の質問に答えていたんです。子供が「先生、スサノオノミコトとか、アマテラスオオミカミの話は本当にあったんですか」ときくと、その無着が「チミ、それね、ぼくこれからハナスしるけどね。あのスンワ（神話）というのは、ほんとうのハナスと違うの。ツガ（違）うけれども、あのネ、このハナスすると長くなるけどね、アマテラシオオミカミ（天照大神）ツウ人がいだの。それがら素戔嗚尊（スサノオノミコト）ツウ人がいだの。この人が悪い人でね、何したがどいうど、まんず、田んぼ荒らして米とれなぐしたの。米どれながったらチミ、ごはん食べられないでしょ。それがら機織（はた）りをこわして……あなた、着物つぐるのに機織りはダイズ（大事）なこってしょ。そういう着物をつぐったり米つぐったりするのを邪魔したがら、アマテラシオオミカミつう人がおごって、あの岩戸に入ったというでしょ。あの岩戸ツウのはどう考えればいいがツウと、あれね、お墓なんだね。人がスぬ（死ぬ）とアナ入るでしょ。アナ入ったらス（死）んだツウことを意味してるんだね――。」（笑い）

これじゃ、ぼくは子供が可哀想になっちゃった。（笑い）　唯物史観の、つまり、やり方を教えて、ま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ず基本的な生産関係の生産手段の破壊とか、そういうところから教えていって、それがいかにいけないことかと。そして神話的なことを全部リアリスティックに教えている。子供の雑誌なんかをみていますと、手塚治虫などがやはり神話を書いている。たとえば神武天皇など他民族を侵略した蛮族の酋長にしている。日本に古代奴隷制なんてないんですが、奴隷たちが苦しめられて鞭で打たれて、そこで金の鳥が弓の上にとまったりして、それで人民を威嚇して……と、全部そういう話です。

ぼくは大学生が白土三平のマンガを読むのはまだいいと思う。それは唯物論をかじってからマンガを読むんだからまだいい。あるいはマンガで唯物論をかじるにしてもです。だけど小学生や子供が読むのは、大学生が読むのとは違うでしょう。これがなんでもないような女の子向きのマンガの中に、支配階級を倒せとか、資本主義はいかんとか、それがたくみにしみ込むように織りこんでいる。大人が神経をつかっても、いつのまにか侵入してきているんですよ。

それで小汀さん、ぼくがさっきから申上げているのは、たった一つ、日本人とは何だ、ということなんです。日本人というのはシャーイなんですね。日本人というのは、本来自分のものを人に上げるときは「粗末なものですが……」、意見をいうときは「つまらない意見ですが」「あまり参考にはなるまいと思いますが……」と、へりくだっていうのが日本人でしょう。ところが言論の自由とか、偏向とかは、日本人の羞恥心をずたずたにしちゃうんですよ。というのは向こう側に羞恥心がないから、そしてつまらん言論、実に質の低いことをいうから、それを質が悪いってネグレクトすると、「なんだ、お前たちは偏向しているじゃないか」と、そして何でもかでも自分たちの政治的意見を通すためには、自分のつくったもの、自分の仕事に対する羞恥心が全然ないから、彼らはてめえのためのこと

のみしか考えない。自分たちのためのものでなければ偏向だ、という考え方になる。こちらは羞恥心が多少あって、ジェントルマンだったら、これは負けますよ。小汀さんみたいな、典型的な、お口のよろしいジェントルマンは負けることになっている。（笑い）

小汀　そのとおり、ほんとうですよ。ぼくはこれでも非常に羞恥心があるんで、人様の前に出ると顔を赤らめる方です。ただ、赤らめても色に出ないだけなんで、それが不自由です。（笑い）

三島　とにかく厚顔無恥というのが彼らの特質ですね。

小汀　ぼくなんか、純情可憐すぎるな。（笑い）

エロティシズムの効用？

小汀　それと彼らの書くものには、悲壮趣味と被害妄想があるんですね。だから建設的なことは何ひとついえない。

三島　それは人間の自然じゃないですか。やはり建設的な楽天的なことをいうのは面白くない。やはり子供をみていれば、おもちゃを買ってやるとすぐにこわしてしまう。それと同じで、まず破壊本能の方が人間は強いですから、それに破壊の方がおもしろいです。

ただ、私は文章はどうも、全般的にみて左翼の方がうまいと思うんです。たとえば『思想の科学』の連中なんて、なかなかうまいですよ。そして面白いことがいろいろ書いてある。だいたい右寄りの文章はつまらない。だから小汀さんみたいな面白い方は、ごく例外的なんです。それからもう一つの欠点はエロティックなことを理解しない。これはだいたい、右寄りの人間の通弊なんです。

小汀　うん、それはたしかにそうだな。

三島　彼らは若い時に一体何をして暮らしていたんだろう。いまじゃ聖人君子のような顔をしているけれども、やはり若いときにはエロな気持ちが豊富だったにちがいないんだ。それを全部否定して人間性というものをもってくることは不可能だと思うんですね。どうしてもエロティックなものがないから、若い人にアピールしない。

小汀　それは非常に重大な要素ですね。どうも無味乾燥というか、何だかきまりが悪くて、自分の身辺をむやみに整理しちゃって、裸の上に印絆纏か何か着ているようだ。それは紋付着てもいいし、フロックコートを着ても、あなたのように袴をはくのもいい。（笑い）〔編集部注・三島由紀夫氏はこの日、絣の着物に木綿の袴というイデタチであった〕　とにかくほどほどにやらなければいかんですよ。　ほんとうに文章は下手ですね。アピールはしないな。

三島　文章が下手ということが第一で、第二にエロティシズムを理解しないこと、この二つが改まらないと、どう考えても言論としての、一番大事な要素であるチャームがないですね。

また私事になりますが、まえに『憂国』という小説を書いて、これは、二・二六の同志が自分に相談しないで事件を起こしちゃったんでその残念さもある、また自分は新婚だったから相談されなかったんだろうという残念さもあり、また同志に殉ずる気持ちもあって、自決する中尉の夫婦の話なんですよね。ところが夫婦の最後のベッド・シーンが長々と書いてありまして、これがみせ場なんですよ。それからあと、二人は自刃していくんです。ところが、一部国家主義者はけしからんというんです。忠良なる兵士の話でありながら、なんであんなに同衾のシーンが長いのか、エロなことが書いてあるの

かって。ぼくはそういう考え方がいけないと思う。だいたいそうなんですよ。

小汀　まあそうですね、やばてんでね。

三島　それもさっきの羞恥心に関係があるんです。清らかなものはそっとしておきたいっていう気持ちがとても強いんだけれども、清らかのまわりには濁流がうずまいている。われわれが清らかなものをもとうとすると、清らかなものだけもっていたら、どんどん押流されてしまう。エロティックというのは清らかなものの中にもあるんだということが理解できないんですよ、彼らは……。むしろ左翼はそこらはうまいですよ。はじめから民青なんかのサークルでも男女交際、それからコーラス・グループとかで、まず男女交際ですね。そして田舎からきた青年なんかは東京でさみしく思っている。そこでサークルにはいると、きれいな女の子なんかがいっしょに手をつないでくれる。まあフォークダンスをやりましょう、そのうちに女の子のほうがアクティブだと、「こんどのなんとかの反戦デモに参加しない？」というと、「きみにいわれたら……」ということになるでしょう。みんなエロティックからはいっていますよ。右翼のほうはたちまちみそぎして、それで鉢巻きして歩こう……。（笑い）

小汀　山中湖畔かなんかに……。

三島　これではチャームという点がむずかしい。ユーモアも笑いもなくてはね。

小汀　そのユーモアがあっちゃいけないんだ。右翼のほうからみるとね。もうかしこまって、しゃっちょこばって……それではいかんですよ。

三島　いかに思想が正しくても欠点は欠点で自覚しなきゃいかんと思いますね。

私はまえから思うことですが、こんどは堅い話です。（笑い）　――どうも、エロばなしといっしょ

になっちゃいますが、核兵器というのは男で、世論というのは女という考えを非常に強くもっているんですよ。

これはまえに福田自民党幹事長なんかにも話したんですが、それをさらに敷衍しますと、こういう世の中にしたのは、どうも核が原因じゃないかと思えるんです。というのは国家権力でも何でも、権力というのは力ですから、「〝力〟イコール兵器」で、兵隊の数と強い兵器をもっている方が強い。当然でしょう。それが世界歴史を支配してきた。いままでは兵器が使えるからこそ強かったんです。ところが使えない兵器をついつくっちゃったんですね。広島で使ってあんな惨禍を起こして使えなくしてしまった。使えない兵器というのは、あるいは力というのは恫喝にしか用をなさない。恫喝ないしは心理的恐怖、ひとつのシンボリックな意味だけが強まってきた。そうなると、片一方の方は使えぬ兵器に対するものとして人民戦争理論みたいに、ずっと下の方からしみこんでくるやつが出てくるのは当然ですね。それをみて被害者意識というのがだんだん勝つ力になってくる。

広島市民には非常に気の毒だけれども、つまり「やられた」ということが、何よりも強い立場とする人間ができてくる。そうすると、やられないやつまでも、やられたような顔をする方がトクだというようになるわけです。つまり女が男にだまされたといって訴えるようなものです。とにかくトクなのは、なぐることじゃなくて、なぐられることだと。そして痛くなくとも、「あっ、イタタタ！」というほうがいつも強い立場をつくれる。それで全学連がヘルメットの下に赤チンを綿にしみこませていて、なぐられると赤チンがダラダラと垂れるようになっているという話もききますが、それも被害者ぶる者の強さの一例ですね。

小汀　昔の女の武器をいまは連中が使っている。泣いたりわめく奴がいまは勝つんだ。

三島　被害者という立場に立てば、強いということはわかっちゃっている。なぜなら向こうは力が使えないにきまっているんだから。それが世論であり、女の勝利だと思うんですね。女はあくまで「弱い女をどうしてこんなにいじめるんだ」と、断然反対してくる。すると男はそれ以上、腕力をふるえないから負けちまうわけですね。そして慰謝料やなんかというむずかしい問題になる。いつも「弱い私が」というところがある。力対力という関係が、戦後の世界ではだんだん薄れてきつつあると思うんですよ。

ですから核抑止理論というのは力対力の理論で、これはある意味では古い理論だと思うんですね。いまだに力対力というものが、一方で厳然とあるんですけれども、しかし、厳然と力対力があるその下では、強さ対弱さというものの戦争になっていると思うんです。だから全学連がいかに乱暴しているようにみえても、あれは被害者を気どっているわけです。われわれは反動権力のおかげでこんなにひどいめにあっていて、なぐられているじゃないかと。われわれの主張は正しいのに、こんなに弱い、武器ももたない学生がやられているじゃないかと、頭から血が流れているじゃないかと。全学連を非難する人たちも、やっぱりおしゃもじをもって、主婦連じゃないけれども、弱いわれわれの生活を守るのにはどうすればいいのか、すべて「弱いわれわれ」というのが前提になっている。これは世論のいちばん大きな要素で、われわれが世論に迎合するためには、自分が強者、あるいは加害者であったらたいへんなことになっちゃう。

自衛隊があんなに悪口をいわれるのはもう、自衛隊が力だということがはっきりしているからです

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c